

施設チエツク改善促す

■「介護保険市民オンブズマン機構大阪」

家族からの暴力や、世話をされないまま放置されるなど、高齢者への虐待が深刻だ。虐待防止に動く団体を支援する「高齢者への暴力防止プロジェクト助成」(朝日新聞厚生文化事業団主催、助成総額1009万円)を受け、13団体が決まった。増え続ける認知症の人や家族の支援、施設での虐待防止、孤立化対策などの重要性は高まっている。各地の活動のうち、2団体の取り組みを紹介する。

特別養護老人ホームやグループホームなどを訪ね、利用者への虐待に気が付かないケースや施設の不備を見つけて出す。そんなオンブズマンの役割を担うボランティアを養成し、施設に派遣して改善をサポートしてきたのが、大阪市のNPO法人「介護保険市民オンブズマン機構大阪」だ。

施設内は利用者と職員の間「閉じた世界」になりやす

き1年かけて月2回ずつ訪問。利用者の声を聞き取り、設備などをチエツクする。改善が必要な点は施設側と話し合う。今年50施設に80人の派遣を予定する。

これまで延べ約400人が参加した。継続してオンブズマンを務めるには改めて研修が必要だが、「リピーター」も少なくないという。

大阪府内のある特養では、認知症のため身の回りのものを口に入れがちな女性に用意した6人部屋に、カーテンも調度品もなかった。3年半かけて施設と交渉し、カーテンなどを付けてもらった。

大阪府内の別の特養では、肩をけがしたという70代の入所者の男性が「トイレ介助のときに職員が手を滑らせた」と打ち明けた。施設側に確認すると、職員は「自分で転んだ」と報告していた。

オンブズマンの指摘に、職員が不愉快な様子を見せる施設も。堀川さんは「一つひとつの施設をよさくすることで、介護施設全体の環境がよくなっていけば」と話す。助成金は、改善事例をもとにした介護施設職員の研修にあてられる。虐待が疑われる事例の電話相談も8月から始める。

(伊豆見代)

お年寄りを守るために

取り組み13団体、助成決定

仮設住宅の介護支援

■岩手「認知症にやさしい地域支援の会」

認知症の介護をする家族や当事者が自慢の思いを語り合える場を作り、多くの人に来てもらいたい。2007年に



活動場所になっている菅野不二夫さん(左)の自宅の集客室で、5月の家族交流会のチラシの準備をするメンバーたち=岩手県陸前高田市

を広げる活動を続けている。市内の仮設住宅の団地53カ所には、今も約5160人が暮らす。会長の菅野不二夫さん(76)は「仮設住宅に入ると閉じこもりがちになる。不安やストレスから認知症になり、症状が進んだりしやす」と心配する。

メンバーで看護師の柴田こほるさん(55)は最近、市内の仮設住宅に住む高齢夫婦の話を聞いた。夫が認知症で、仮設住宅に入ってから症状が進み、「家に帰る」といって、徘徊してしまう。妻も心労で体調を崩した。「介護する家族にとって症状を受け止めるのは難しいこと。介護者が耐えきれずに感情的になってしまふ前に、『心』に相談に来ればいい」と思ってもらえれば。「地域包括支援センター」と共同で開催する認知症サポーター養成講座では、認知症の人の症状にどう対応するか、コミカルな寸劇を演じて伝えている。

講座や家族会の案内は、メンバーが仮設住宅を回ってチラシを配る。菅野さんは「家族会に来ていないが、認知症で悩んでいる家族はもっと多いはず。こちらからさそって

するワーキンググループに参加していた看護師、介護職員、介護家族など約10人で結成。元高校教諭の菅野さんは妻とともに、認知症の母の介護を22年続けた経験がある。

交流会を開いていた公共施設は津波で使えなくなり、沿岸部にある菅野さんの自宅も約1層が水につかった。菅野さんは家の改修時に集客室を作り、そこで交流会を開く。

交流会は2カ月に1度。話を聞いたり助言をしたり、行政の相談先も紹介したりする

2013年5月17日の朝日新聞紙上で助成決定の発表がありました。

2013年5月17日の朝日新聞紙上で

助成決定の発表がありました。